〔新刊紹介〕

足立直子・金泯芝・田村修一・外村彰・橋本正志・渡邊浩史編『芥川と犀星』

深町博史

二〇一二年は、芥川龍之介の生誕一二〇年と室生犀星の歿後五〇年にあたる年であった。『芥川と犀星』はそれに向けて企画され、六名の編者によって編まれた作品集である。本書は読者の「芥川と犀星の文学に親しむ契機」だけでなく、「大正から昭和へとそそぎ込む豊饒な文学の流れの一端でも触れる契機」ともなるべく構想されており、全四部の中には多様な作品が収録されている。

この書の中核をなしている「Ⅰ　芥川龍之介」と「Ⅱ　室生犀星」には、「芥川は晩年に至るまでの多面的な作風の変遷を、犀星はその長い詩歴と旺盛な生命力を示す諸作」が収められている。ここに精選された作品群を通じて、両者の文学的展開を概観しつつそのエッセンスを捉えることができる。

「Ⅲ　俳句」においては、東洋的文人趣味のあった両者の俳句が採られている。掲載されている句の数は決して多くないが、それでも芥川の高度に洗練された自然詠と、犀星の自由で素朴な句を味わえる。ともに芭蕉を敬愛し、盛んに俳句談義を交わす俳友でもあったという彼らの句風の対照は大変興味深い。

「Ⅳ　周辺の文学者」では、いずれとも親交のあった萩原朔太郎・堀辰雄・中野重治が取り上げられている。三名による回想は、芥川と犀星の人間性を各々に異なる角度から照らし出している。その中には二人に対する評や他の文学者との比較等が見られ、同時代における芥川と犀星の立ち位置も窺い知れる。

その他、随所に解説が差し挟まれている。作品に関する基礎的な情報に加えて、創作背景や鑑賞のポイント、研究上の課題等が六名の編者により様々に説明されており、個性に富んだものとなっている。また、コラムや略年譜も簡潔ながら見事に要点が押さえられている。

あとがきによると、芥川と犀星を組み合わせた作品集は「昭和四年刊の春陽堂版『明治大正文学全集』以来かもしれない」とのことである。限られた紙幅の中に秀作を数多く収録しているが、これまであまり注目されてこなかった二人の関係性に注目した点で意義深く、主要な小説・詩だけでなく、広く「俳句」や「周辺の文学者」の作品も収めている点は高く評価できる。この『芥川と犀星』は、読者に対して芥川龍之介や室生犀星の文学だけでなく、より広く大正・昭和文学への関心を抱かせ得るものとしてごく優れた書である。

（おうふう、二〇一二年四月、二〇〇〇円＋税）

（ふかまち・ひろし　本学博士後期課程）